

## 「北京の蝶を夢みて～ご挨拶にかえて」

小誌「VIN 1号」を発刊してはや半年が経ちました。国内外の多くのお客様やガラスの関係者の方々に本紙をお配りできました。反響は思いのほか好意的で、たくさんの励ましの言葉やご意見などを頂き、やはり発刊できて良かったと言うのが正直な気持ちです。

初版を作るための苦労は少なくなかったのですが、「ガラスの良さを、そしてもっとより良いものを届けよう」という思いを勇気づけていただきました。

この半年の間に、世の中は目まぐるしく動いていました。中でも、2007年11月にインドネシアのバリ島で開催された気候変動に関する政府間パネル(IPCC)の第3次評価報告の内容はショッキングな内容でした。1997年の京都議定書の警告を遥かに超え、地球の今の深刻な状況を科学的に立証し、各国、地域、個人々々の環境への自覚と迅速な行動を促すものとなっています。また2008年1月のダボス会議でも同様な事柄がより一層大きなテーマとなりました。来る7月に開催予定の北海道の洞爺湖サミットでは更なる大きなウネリとなって行くでしょう。

例えば、ヒマラヤ氷河の溶解はこのまま行くと、氷河湖の崩壊と水源の破壊を招き十数億の人々の水不足を来すということです。聡い人々は水を確保して、お金儲けに繋げようと奔走し始めているようです。醜い「水の争奪戦」となりかねません。

「北京の蝶」という言葉があります。北京で胡蝶が羽ばたくと世界中が大嵐になると言う。計算、特にコンピューターの世界で使われる喩えです。最初のごく小さな計算誤差や間違いが、何度も繰り返し演算を続けて行く内に膨大な数の変化となって表われる現象を捉えてこの言葉が喩えに使われています。私は「人間には、これまでの我々の小さな過ちの積み重ねも正すことができる知恵も力もある」と思います。環境改善に向けた人々の小さな努力の積み上げが、日々の生活活動の中で繰り返されれば、この喩えのように、予想を超えた大きな良い変化をもたらし得ると思います。一人の自覚は小さな胡蝶の羽ばたき、それが周囲を動かし、地域を動かし、国を動かし、世界を動かし、地球が変わり、そして還ると。

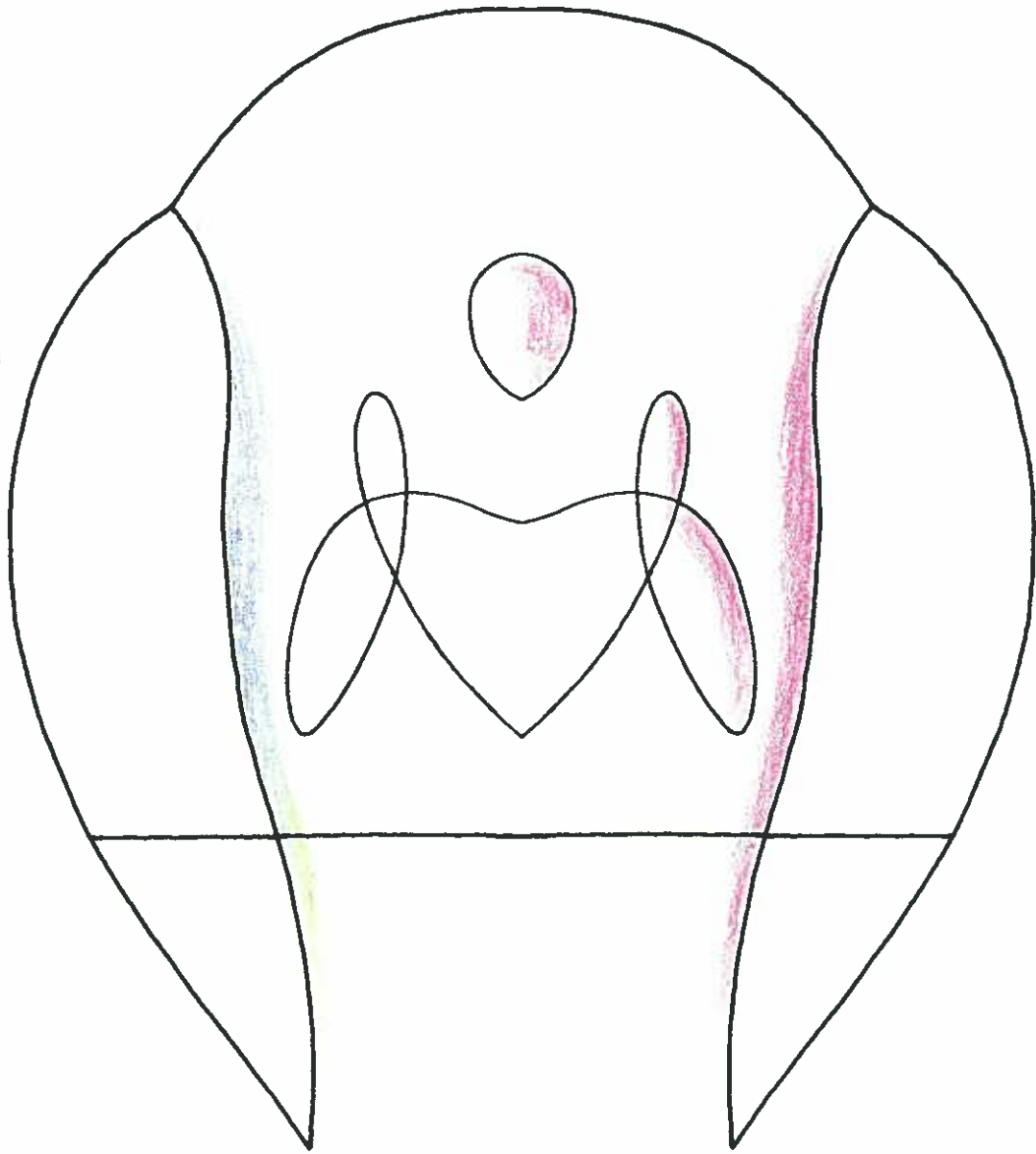
私たちの今回の環境のテーマは奇しくも「水」です。「ニューヨーク」、「パリ」、「東京」の「水」。「ミネラルウォーターに負けません。」訪れた水道局の人々は自信を持っていました。冷やして飲めばもっとおいしいと「カラフ」を自慢するのはパリの水道局。人々の「喜ぶ顔」と「安心」のため、日々努力している。「偉いと思う。」この小誌のために貴重な時間を割き、対応頂いた各国の水道局の方々に敬意を表し、改めてお礼を申し上げます。また、ルネ・ラリックとの関わりで「箱根のラリック美術館の人々」と、またセレブ・インタビューでの素敵な「インド・ムンバイの女性」との「出会い」は私たちが新たな世界に誘ってくれました。この出会いが更なる新たな良い出会いに繋がりますように。

表紙の「ミュージ」に捧げたのは「香り」。私たちのガラス・ボトルが香りを包む華やかな役割を担って、時を駆けてくれますように。

# WIN

2008 Spring  
Glass Culture Paper  
Vol.002  
By Koa Glass

何度も生き還る地球の恵み、ガラス。



「節句は5月の節句。」

宮中でも普通の民家でも

菖蒲、蓬など薫り高い草を飾る。」

平安の時代に生きた才媛 清少納言は

随筆「枕草子」の中で

晩春とその季節の香りを愛でている。

「香を焚いて一人寝すること」、

「良い香のする着物を着たとき」など

今日で言うアロマティックスの世界が

息づいている。

古来より「香り袋」も愛用され

人気は渡来品の

「丁香」、「麝香」、「竜腦」。

「ポプリ」の入った「サシェ(Sachet)」は

西洋譲りではあるが

「バラ」、「ラベンダー」、「モクセイ」、

「クローバー」、「ミント」が

今日好まれる香りの代表。

鏡の前でお好みの香りに浸り、

今日の私を演出する女人。

香りにはいつまでも人を魅きつけて

止まない「神秘」がある。

そしてガラスの器はその「神秘」の

「揺りかご」

# 走る社交場

オリентエクスプレス その意外な終着駅



フランス北部の町カレーを出発した列車には傷心の一人の英国女性が乗り込んでいた。前年に母親を亡くし、はたまた夫の浮気の露見などの心痛から記憶喪失が原因の「謎の失踪事件」まで起して世間を騒がせていた。そしてつい数ヶ月前にはその夫とも離婚に至るといふスキャンダル続きの女性。当時人気上昇中の女流推理作家のアガサ・クリスティ女史その人であった。それまでの人生に区切りをつけるように

癒しの旅の行き先を保養地のバーミューダー諸島からバグダッドに変更しての旅でもあった。「これまでに、一度これに乗ってみたいと大いに望んでいた夢の列車」シンプロンオリент急行は彼女を乗せて一路遙か最初の目的地イスタンブールに向けて速度を上げていった。

「カレー」-「ミラノ」-「ベルグラード」-「イスタンブール」ここで、ボスボラス海峡を渡り列車を乗り換え、「ハイダル・パシャ」-「アレppo」-「ダマスカス」、そして砂漠越えて「バグダッド」に向かう長旅であった。この旅の中で彼女を癒したのは列車内で会った人々との会話、これまでに見たことのない情景や、美しい景色、そして、前々から乗って見たかったこの列車の持つ魅力であっただろう。

その後のクリスティの小説には、これらの経験がまるで宝石を散りばめたように随所に表われる。そして運命の人との出会いを契機に、しばしば、この列車の旅人となったのであった。

当時バグダッドから少し離れたウルの遺跡の発掘に携わっていた歳下の27歳の新鋭の考古学者マックス・マローワンとの劇的な出会い、そして結婚。

1930年代に最も充実した時期を迎え、「オリент急行殺人事件」を始めとする数々の名作を生む彼女のミステリー作家としての新しい人生はこの旅から始まった。



歴史の町小田原からローカル線で少し走ると富士の懷に抱かれるように箱根湯本がある。ここから登山鉄道でスイッチバックを繰り返し山肌を



当時のオリент急行は豪華であった。車内はアールヌーボーやアールデコ調の造りで、豪華で旅心を誘い、旅を癒すに十分な仕掛けがなされていた。乗車名簿に名を連ねた多士済済の各国・各界の名士のせいもあって「走る社交場」の伝説が生まれた。

このオリент急行列車はベルギーの青年銀行家ジョルジュ・ナゲルマケールスが米国滞在中に横断鉄道に触発され、これを改良し「国際寝台会社（ワゴンリー社）」の運営を始めたものだった。

その後1930年代には、4ルートのオリент急行が運行されオリент急行の全盛期を迎える。

当時、既に装飾の分野から空間芸術に新境地を開きつつあった「ガラス芸術の巨匠ルネ・ラリック」はこの頃、ワゴンリー社の依頼により、パリーニース間を走る列車のサロンカー、「ブルマンタイプ コートダジュール号 4158型」のデザインを依頼され制作していた。美しい調度品と共にパッカスを称える酒宴で踊る人を描いた意匠のパネルは葡萄のデザインを散りばめた背景に演奏や踊りに夢中の若い男女の見事な姿が浮き彫りにされ、ガラスが車内や外の光を魔法の様に反射・投影して色鮮やかに変幻自在空間をえている。この列車はその後、数奇な運命をたどる。



縫うように登り詰めると湯治場の強羅にたどり着く。ここは古来、皇室を含め文人や人々のリゾート地でもあった。更にバスに乗り継いで、仙石原の中央部に至るとそこに「箱根ラリック美術館」がある。ここは目白にある朝香宮邸（現東京都庭園美術館）と共にラリックの旅のひとつの終着駅となっている。宝飾工芸品、初めて手がけたシクラメンの香水ビン、名車BUGATTIを飾るトンボのカーマスコット、室内装飾工芸品など数々の名品たちが彼の時代の言葉で話しかけてくる。そしてまさに時代を駆け抜けたオリент急行コートダジュール号が数々の彼の時代を運んだ後に、終には箱根の乙女峠を上り詰めオリентの東の果てのこの地に至り、今は静かに時の番人のようにこれらの品々に寄り添って共にある。列車内を飾る「彫像と葡萄」の若き男女のガラスのパネルはラリックとラリックの時代の熱き情熱をそのままにパッカスの宴を昇っている。

「私は人見が夫は

## 三面鏡ひと模様

「私があえて小さい鏡に買い替えた理由。」  
インド・ムンバイの女性(60歳)

ムンバイの高級住宅地マラバール・ヒルの、緩やかなカーブの坂道を上っていくと、緑の樹間に、瀟洒な住宅が連なる。ここはムンバイの南に位置し、インド門からMarine Drive(Queens Necklace)を沿って北に上がったところで、イギリスの植民地時代、ほとんどイギリス人だけが住んでいた高級住宅地で、今も高級住宅街である。

そのひとつ、高層フラッツに住むインド女性を訪れた。ドアベルを押すと、民族衣装サリーを着たお手伝いが顔を出し、中に招き入れてくれる。入って、まず感じるのは調和である。テーブル、ソファ、クッションと絵のカラーが青と緑でコーディネートされている。仏像が窓際に安置されている。

ここに住む女性が、化粧し始めたのは18歳から。今は外国ブランド品を中心に使っている。ただし、外装パッケージには興味なく、中味重視であり、その中味はアレルギーなしのもの。自然感覚で肌に問題がないものを使っている。

朝、ウォーミングフェースウォッシュで洗面し、シャワーを浴び、モイスチャライザー二種類を、その日で使い分け、サンスクリーンをつける。昼にパーティや昼食に出かけるときはパウダーをつけ、口紅をつける。アイラインはしない。香水は20年間同じものを使用し続けている。夜は保湿クリーム。ブランド化粧品は基本的に海外で買ってくる。

日常の生活、今がベストだという。朝の散歩の前、鏡の前に立ち、鏡の中の自分に問いかけ、今日も良い日になると、鏡の中の自分の感情をコントロールする。感情をコントロールできるのは、散歩と瞑想を続けてきた結果だ。

散歩は沈黙の丘、これはパールシー教の五つの沈黙の塔DAKHMA=TOWER OF SILENCEが散在しているところで、最も古いものは1673年に創建したもの

であるが、その近くの公園を一時間歩く。

その後、瞑想に入る。瞑想は1987年からずっと続けている。精神的な落ち着きの訓練であって、結果として、年齢による小皺が増えてきても、それは納得できるもので、幸せの状態を示すものだと思うようになった。瞑想によって日々の問題を、捨てるものは捨て、取り上げるものは取り入れ、コントロールできるようになったのだ。

これは、自分がある意味で世間から切り離すことであり、余分なことは考えないことに通じる。昨日は終わった。明日はまだ来ない。だから今日を大事に生きるという考え方で、これが幸せに生きるコツだ。

化粧室の化粧台の鏡はあえて小さいものにした。洗面台の鏡も小さくした。実は、以前はもっと大きな鏡だった。7年前に今のものに変えた。鏡は小さい方が落ち着いて見られる。鏡は自分のエゴの大きさと決まると思っている。人の内面は鏡の大きさが証明すると思うからだ。小さい鏡が自分にとっては良い。それはエゴを出させないことにつながるから。鏡を大きくするという事は自分のエゴを大きくすることに通じると思う。

体全体を散歩と瞑想でコントロールし、その結果現れる表情を自分のエゴにふさわしい小さな鏡でチェックする。これが幸せのチェックポイントであり、日頃は99%笑いで過ごしていると、素敵な微笑みを浮かべる。インド・ムンバイには素晴らしい女性が暮らしている。



「私は考古学者と結婚して良かった」アガサ・クリスティ女史が言った。  
人見知りの強い人であったが、ウィットに富んだ人でもあった。  
「夫は私が年をとれば、とるほど私を愛してくれるのよ」と。

# 『よみがえる水道水。世界の水道水最新情報。』

水が大事なことは誰でも知っている。特に、ストレスの高い現代社会で生活し、その中で心身ともに健全に過ごそうとしたら、こまめな水分補給は欠かせない。一日の水の摂取量は、成人男性でおよそ2.5リットル。そのうち飲み水による水分補給は一日1.2リットル程度。毎日、摂取するものであり、人間の体の60%は水分だから、よい水を飲みたい。これは人間に共通する本能であろう。そこで今回、世界の代表的な大都市、東京、パリ、ニューヨークの水道水について、実態調査した結果をお伝えしたい。

(パリ)パリ市14区の水道管理局を訪問し、局長のOlivier Jacque オリビエ ジャック氏から説明を受けた。



パリの水道水の原水は、セーズ川の水と地下水で半々であり、浄水と配水ともに民間企業に委託し、浄水は高速処理浄化方法を採用している。

水道水ともう一つ、パリ名物の道路清掃水の第二水道があるが、これは公園の樹木用として使用されていて、セーズ川の浄化していない水である。

水道水の情報は毎年公開している。市民から水に対するアンケートも取っている。おおもね好結果だが、塩素の臭いが強いという意見もある。そこで、オリジナルのカラフ(水差し写真A)のデザイン・コンペティションを行って、選ばれたカラフに水道水を入れ、冷蔵庫に二時間入れることを奨めている。そうすると塩素の臭いは消える。

カラフは1リットル容量、シンプルな形で、手にしっかり馴染むガラス製である。マーク・ロゴを毎年キャンペーンに合わせて変え、水道水のイメージアップに貢献させている。

これらの結果、パリの水道水とミネラルウォーター比率は、現在50%ずつのシェアであるが、水道水の利用率は向上してきている。その要因は水道水のよさが理解されてきたこと、価格が安いこと、環境問題意識の向上と、ミネラルウォーターは持ち帰りが重いということからである。

今まで、パリの水道水は問題なく、おいしいというPRを十分してこなかったが、水道水成分は、エビアンに近く、特にフランス各地の中でもパリはカルシウムが少なく、おいしいということは今後は伝えていく方針だ。

(東京)日本が高度成長を遂げた1970年代前半、東京都が原水としている利根川・荒川水系の水質汚濁が進み、水道水質が悪化し、かび臭いなどの苦情が水道局に殺到し、東京の水道水は不味いというイメージが定着してしまった。

そこで水道局は、河川の水質保全対策と、粉末活性炭の注入や高度浄水処理の導入など、水質の改善を進める「安全でおいしい水プロジェクト」などを行った結果、現在ではかび臭さのクレームもなくなり、おいしさの点でも向上している。そこで、さらに、水道水の安全性や、おいしさを実感してもらおうと、2004年に「世界に冠たる・東京水」と銘うって、金町浄水場の高度浄水処理水をボトル(500ml写真B)に詰めて販売を開始した。硬度88.5mg/Lと中程度の軟水(WHO基準)で、飲んだ人たちから「ミネラルウォーターに比べて遜色がない」と好評である。金町浄水場を見学した際に飲んで、東京の水道水は確かにおいしいと確認した。



(ニューヨーク)ニューヨークの水道水はおいしいか、不味いか。一般的にはおいしいという意見が多い。何回かニューヨークに滞在した経験からはおいしいと断言できる。その要因を尋ね、現場を見学したいと、ニューヨークの水道局に申し入れたところ、あっさり9.11以後は許可していないと断られたが、同水道局のホームページが詳細に発表しているので、そこからポイントを探ってみた。

ニューヨークの水道水は、最初はマンハッタンのダウタウンの井戸水から発し、その後の人口増加に伴って、市の北に位置するクロトン流域から取水し、ここは今でも全体の10%を供給している。今では残りの90%を、北西のキャッツキル・デラウェア流域から、クロトンまで持ってきて、ニューヨーク市内に供給している。

デラウェア流域にある、ひとつの貯水池の写真に掲載した(写真C)。だが、この写真使用の許可を受けるのが大変であった。時間がかかりようやく了解され、掲載可能となったもので、貴重な写真となった。

今のところニューヨークは幸せである。天然ミネラル水道水を飲むことができるのである。そのための水質検査体制は万全にしている。

ただし、水道水の原水はおいしいが、それを通す配管に問題ある場合は、当然のように味が変わる。こういうことがあるとしても、天然ミネラル水道水を飲めるのは素晴らしい。

以上の通り、東京、パリ、ニューヨークとも、水道水は安全でおいしいことが確認された。現地に旅行されたら確認されるとよろしいと思います。



興亞硝子株式会社

本社 〒132-0035 東京都江戸川区平井1丁目25番27号  
営業本部(直通電話)  
大船工場 〒251-0013 神奈川県横浜市小坂23番  
市川工場 〒272-0126 千葉県市川市千鳥町2番  
大阪営業所 〒341-0041 大阪府中央区北浜3丁目1番14号  
タカラ屋橋ビル3階  
上海高麗玻璃有限公司 〒201801 中国上海市嘉定区外灘鎮華創路88号

<http://www.koaglass.co.jp/>

TEL. 03(3684)1211(代)  
TEL. 03(3684)2705(代)  
TEL. 0466(23)5421(代)  
TEL. 047(397)4101(代)  
TEL. 06(6229)1619(代)  
TEL. 021(5915)6665(代)

走る社交場 中の写真は「箱根リリック美術館」提供  
NYデラウェア流域の貯水池の写真はNY市DEP提供

2008年3月31日 出版責任 営業本部

年2回発行予定 次回は2008年9月を予定しています。